

1. 開催概要

展覧会名	印象派を超えて一点描の画家たち ゴッホ、スーラからモンドリアンまで	
開催施設名	会期	入場者数
国立新美術館	平成 25 年 10 月 4 日～12 月 23 日	182,744 人 (開会式・内覧会含む)
広島県立美術館	平成 26 年 1 月 2 日～2 月 16 日	28,818 人
愛知県美術館	平成 26 年 2 月 22 日～4 月 6 日	78,666 人
<p>●開催概要</p> <p>1. 展覧会内容と評価</p> <p>世界有数のゴッホ・コレクションを誇るオランダ・クレラー＝ミュラー美術館の全面協力を得て開催された本展では、印象派から新印象主義へとつながる点描画法を、抽象絵画の草創期までの流れで捉え、同館所蔵作品 74 点と国内所蔵作品 27 点を合わせた油彩、水彩、素描など 101 点を展示した。</p> <p>本展は、ジョルジュ・スーラが開拓し、ポール・シニャックが普及させた「分割主義 (Divisionism)」という理念とその実践に着目し、印象派の画家たち (1 章/印象派の筆触)、分割主義の創始者であるスーラとシニャック、フランスの画家たち (2 章/スーラとシニャックー分割主義の誕生と展開)、パリで分割主義を受容したフィンセント・ファン・ゴッホ、総合主義のポール・ゴーギャン、フォーヴィスムの画家たち (3 章/ゴッホと分割主義)、フランス国外でいち早く分割主義を紹介した「20 人会」のテオ・ファン・レイセルベルヘやアンリ・ヴァン・ド・ヴェルド、ヤン・トーロップとアムステルダム・ルミニスムの画家たち (4 章/ベルギーとオランダの分割主義)、モンドリアン (5 章/モンドリアンー究極の帰結) のいずれも「点で描く」という共通の経験を経た 25 人の画家たちを紹介した。</p> <p>本展では、日本初公開のスーラの油彩 3 点やゴッホ、モンドリアンの主要作品を紹介するだけでなく、これまであまり日本で紹介されてこなかったオランダ、ベルギーの分割主義の作家を紹介する機会を提供することができたため、展覧会の内容については国内の専門家からも高い評価を受けた。</p> <p>2. 入場者数</p> <p>入場者数については各会場ともに当初の目標を達成することはできなかったが、来場者からは軒並み高評価を受けており、本展が果たした役割は十分であったと考える。</p> <p>【国立新美術館】 182,744 人 (開会式、内覧会含む) 【広島県立美術館】 28,818 人 【愛知県美術館】 78,666 人</p>		

2. 美術品補償制度の活用による国民的利益に関する取組結果

1. 展示作品の質・量の充実

今回の出品作品にはスーラ、ゴッホなど作品評価額が非常に高い作品が数点含まれており、展覧会開催のためには高額な保険料を負担する必要があったが、本補償制度の適用を受けたことで展覧会を実現することができた。特に日本初公開であり、点描画法紹介に不可欠なスーラの油彩作品3点は、展覧会の中心となる作品であったが作品評価額が非常に高く、同制度の適用を受けなければ主催者が保険料を負担することは難しく展覧会開催も危ぶまれたが、最終的に借用が可能となった。

また、保険料が軽減されたことにより東京以外の会場（広島、愛知）への巡回が可能となったため、結果としてより多くの日本国民に貴重な機会を提供することができた。

2. 教育普及活動の充実

ゴッホやモンドリアンなど、新印象派を代表するスーラに続く一連の画家たちによる色彩の探求への理解をより深めてもらうために各会場で記念講演会などを以下の通り開催した。

【国立新美術館】

●記念講演会

日程：2013年10月14日（月・祝）14:00～15:30

会場：国立新美術館3階講堂

講師：坂上桂子（早稲田大学文学学術院教授）

参加者人数：170人

●解説会

日程：2013年10月20日（日）14:00～14:45

会場：国立新美術館3階講堂

講師：長屋光枝（国立新美術館 主任研究員）

参加者人数：125人

日程：2013年11月7日（木）14:00～14:45

会場：国立新美術館3階講堂

講師：米田尚輝（国立新美術館 研究員）

参加者人数：92人

【広島県立美術館】

●記念講演会 「新印象派と楽園のヴィジョン：アナーキズムを超えて」

日程：2014年1月26日（日）14:00～15:30

会場：広島県立美術館地下1階講堂

講師：千足伸行（成城大学名誉教授、海の見える杜美術館顧問）

参加者人数：200人

●美術講座 「モンドリアンの芸術」

日時：2014年1月19日（日）13:30～

会場：広島県立美術館地下1階講堂

講師：越智裕二郎（広島県立美術館館長）

参加者人数：80人

●美術講座 「ゴッホからモンドリアンまで 一色彩の自立ー」

日時：2014年2月9日（日）13：30～

会場：広島県立美術館地下1階講堂

講師：泰井良（広島県立美術館主任学芸員）

参加者人数：95人

【愛知県美術館】

●記念講演会 「点描ー近代から現代への新しいかたちー」

日程：2014年3月15日（土）13:30～15:00

会場：アトスペースA（愛知芸術文化センター）

講師：加藤有希子（埼玉大学准教授）

参加者人数：163人

●子どものためのワークショップ

日程：2014年3月9日（日）10:30～16:00

会場：愛知芸術文化センター10階および12階アトスペース

講師：山口百子（美術家）

参加者人数：40人

●スライドトーク

2014年3月8日（土）、3月16日（日）、3月21日（金・祝）の11:00～11:40、アトスペースEF（愛知芸術文化センター12階）にて愛知県美術館学芸員（中西園子、副田一穂）が解説をした。参加者人数：のべ120人

3. 入場料の無料化、軽減等

【国立新美術館】

中学生以下の入場無料とともに、高校生を対象とした無料日を3日から18日に拡充し、2013年10月5日から11月24日までの土日祝日、計18日間とした。結果として、団体を除く個人で観覧した高校生の総入場者数1,384人のうち、46%となる645人がこの無料日に観覧しており、一定の結果を出すことができた。

【広島県立美術館】

美術品補償制度を適用できない場合は、高額な保険料の支払いが生じるため、展覧会全体の経費が上がり、広島展開催分担金が通常よりも高くなる可能性があった。予算が逼迫する場合は中学生以下の料金を有料とするケースもあるが、今回は制度が適用されたことにより、保険料も減額されて開催分担金も適正な金額となったため、中学生以下の入場料を無料にすることができた。

【愛知県美術館】

美術品補償制度を適用できない場合は、高額な保険料の支払いが生じるため、展覧会全体の経費が上がり、愛知展開催分担金が通常よりも高くなる可能性があった。しかし、今回は制度が適用されたことにより、保険料も減額されて開催分担金も適正な金額となったため、通常の展覧会同様に中学生以下の入場料を無料にすることができた。

3. 事故の有無（軽微な事故、ヒヤリハット事例も含む）

ヒヤリハット事例も含め、事故は全くなかった。

4. 安全配慮に関する特別の対応

【日本国内の作品輸送】

全便にクレラー＝ミュラー美術館クーリエ1名と主催者1名の計2名が同乗した。作品輸入時の成田空港～国立新美術館、輸出時の国立新美術館～成田空港のトラックには警備車1台が伴走し、全便2名のドライバー体制で休憩ごとに交代して作品を輸送した。また会場間の作品輸送時には、全便2名のドライバー体制に加え、警備車2台でトラックを監視しながら走行し、各館での作品搬入・搬出にも警備員が全て立ち合いをした。

【監視カメラ】

事前に監視カメラの配置図を入れた図面をクレラー＝ミュラー美術館に送り、事前了承を得た上で死角ができないように監視カメラを配置した。展示期間中にカメラの設置位置や死角が無いかなどをクレラー＝ミュラー美術館の責任者が現地で最終確認して万全を期した。

【防犯アラーム】

クレラー＝ミュラー美術館から指定のあった作品については防犯アラームを設置して、防犯対策を講じた。

5. 紹介事例・今後の改善点等

これまで数多くの印象派の展覧会が日本で開催されてきているが、今回の「分割主義（Divisionism）」という日本であまり馴染みのないテーマで、世界的に希少価値の高いスーラや評価額が高騰してなかなか日本で紹介することが困難になっているゴッホに加え、フランス、オランダ、ベルギーの主要な作家を紹介する展覧会を東京のみならず、広島、愛知で広く紹介できたことは、美術品補償制度の「国民が美術品を鑑賞する機会を拡大する」という目的を達成できたと考えている。

本展はオランダの美術館の所蔵作品を対象にした初めてのケースだったため、クレラー＝ミュラー美術館に本制度を理解してもらうためにかなりの時間と労力を費やした。最終的には本制度の内容について承認を得ることができ、本展がオランダで初めてのケースになったことは、本制度においても大きな実績になったと考えている。これをきっかけにオランダ国内の美術館に対する本制度の理解がさらに深まることを期待している。

美術品補償制度の適用については、展覧会チラシ、ホームページ並びに会場入り口のメイン看板などにその旨を記載した。国立新美術館では会場内で配布する作品リストにも記載して展覧会の来場者に対しても周知に努めた。

6 展覧会の収支決算書

主催者名 国立新美術館(東京展のみ)、広島県立美術館(広島展のみ)、
愛知県美術館(愛知展のみ)、NHK、NHKプロモーション、中日新聞社(東京新聞)

●収入

区分	決算額
	万円
展覧会収入・その他収入	60,157
共催者負担	6,775
収入総額	66,932

●支出

区分	決算額
	万円
企画準備等基本経費	46,179
設営・運営等会場関係経費	20,753
支出総額	66,932